

令和七年度入学試験問題（学校推薦型選抜Ⅰ）

小論文

中等教育教員養成課程 中等教育プログラム 書道専攻

注意事項

- 1 時間は六〇分です。設問をよく読んで解答してください。
- 2 解答紙は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に記入してください。
- 3 提出する解答紙すべてに必ず受験番号を記入してください。

【一】 次の文を読んで、あとの問いに答えよ。

和歌や書は、平安時代の王朝貴族にとって欠くことのできない教養であり、その巧拙は人々の大きな関心事であった。当時は宮廷の儀式や行事、お祝い事に際して心を尽くした贈り物をするのが通例であった。とくに珍重されたのが、身の回りにおいて鑑賞する調度手本、すなわち【A】であった。この言葉は、本来は古人の筆跡を指す言葉であったが、現在は平安から鎌倉時代までの主として歌集を書写した筆跡をいう。

中でも『B』は最初の勅撰和歌集で最も重要視され、筆跡の巧みな人によって数多く書写された。この【C】は、紐で綴じた冊子本で、原装のまままで伝わり、『B』が完全に残っている最古の写本である。書と料紙が織り成す美しさは王朝貴族の美意識を反映しており、まさに文学と書と工芸をコラボレーションした作品として、極めて貴重である。

料紙は、紫・赤・緑・黄・茶・白など色とりどりで、濃から淡、淡から濃へと色を連ねるように用いられている。その表面は貝殻を潰して微細にした胡粉を料紙に塗って唐草・菱文様・亀甲などの型文様を雲母で刷り出したり、摩擦によって文様を表す空摺の技法を用いた日本製の唐紙である。裏面も金銀の切箔・野毛・砂子などを撒いて華麗に装飾される。

その美しい料紙に、豊潤な線や繊細な線を駆使して、リズムカルで流麗な書風で書写し、下巻ではさまざまな散らしの妙も見せる。「本願寺本三十六人家集」（略）「などの同筆遺品を残しており、この筆者が当時屈指の能書であったことがしのばれる。三跡の一人として著名な藤原行成の曾孫にあたる定実（二〇七七―一一一九）の筆と推定されている。

上巻の末尾にある「（元号略）三年七月廿四日」の奥書にちなんで【C】の名前で呼ばれる。もと、加賀前田家伝来で、三井高太氏の遺志によって寄贈された。

※出典 『東京国立博物館の名品でたどる 書の美』島谷弘幸著 東京国立博物館監修 毎日新聞社 五二頁～五五頁  
※出題の都合上、文章を一部改変しています。



図版 国宝【C】 東京国立博物館所蔵

〔東京国立博物館の名品でたどる 書之美〕より

(問一) 文中の【A】は、歌集を書写した筆跡のことを表す語句、『B』は、我国の最初の勅撰和歌集を示す語句が入ります。

【C】には、図版に掲げた、国宝であり解説文で紹介されている藤原定実の筆跡名が入ります。

【A】『B』【C】の語句を明らかにして用いながら、図版の筆跡の書風や特徴を四〇〇字以内で述べてください。

## 〔二〕

次の問いに答えよ。

古来より、日常生活や社会生活において書が認め<sup>した</sup>られてきました。本来、実用として書かれた古名跡をあげて、なぜ実用でありながら芸術作品として大切にされ伝わってきたのかを含めて、手書き文字文化の特性についてあなたの考えを四〇〇字以内で述べてください。